

国語教育個体史稿

— 学習者からの感想を中心に —

野地潤家

わたくしは、昭和二年（一九四六）九月、愛媛県立松山城北高等女学校に赴任し、昭和三年（一九四八）三月末まで、満一年七か月、国語教育の実践を、主として二年生の二学期から三年生の三学期まで五学級二四八名を対象に重ねた。その間の実践管為については、在任期間を、

I 城北高女時代 その1（昭和二十一年度） 一九四六年九月

～一九四七年三月

II 城北高女時代 その2（昭和二十二年度） 一九四七年四月

～一九四八年三月

の二期にわけ、国語教育実践史として記述し、昭和二年（一九五〇）三月から九月にかけて、「国語教育個体史研究」（全三冊、白鳥社印刷）として報告した。

「国語教育個体史研究」第三冊（昭和29年9月20日刊）の「あとがき」には、わたくしの国語教室に学んだ生徒たちの授業についての感想一三例を収録した。「あとがき」は昭和二八年（一九五三）一二月二日に記している。したがって、生徒だった人たちの感想は、昭和二七年一月から昭和二八年一二月ころまでに記述されたもの

であった。

しかし、わたくしの国語教育個体史研究（城北高女時代の国語教育実践史の記述と考察を中心にした）のため寄せてもらうように頼んでいた、かつての国語教室についての感想は、翌昭和二九年（一九五四）になっても、つきつきに送られてきた。

ここには、届けられた感想のうち、一二例を掲げることとした。（各感想に冠した番号は、すでに収録して報告した一三例につづく通し番号とした。諒とされたい。）

二

Λ14V（三松） 安永秀子 あのころのこと

国語教室の思い出について何か書くようにとのお便りを戴いてもう一ヶ月半になろうとしている。いつか教室で「たよりのありかた」のときの心得二十条のうちに、返事は折返ししたため……とあるの思い出して、ひそかに冷汗を拭っている。大事な品物を借りっ放しにしているような、横着な、それでいて、ちくりちくりと随分つらい気持である。

この一つから推して考えてみるに、あの頃もやっぱりあまりいい生徒ではなかったようである。一応真面目そうな顔をしていながら、

あまり勉強はしなかった。生来頭脳が粗雑に出来ていた点もあるが、先生の御質問には、いつもたじたじであった。現在も相変わらず出ている、あの虎の巻と称するものは、先生の時間に限っては、その効力たるや極めて微々たるものであった。「あれは本屋の小僧さんが書いたものですから云々」と例の特徴のある笑い声でよく言っていて居られた。所詮自分の頭で考えるより仕方がなくなってしまうのである。パツパツと手を挙げるのは数人、いつも決まった顔である。私はまだうん、んと考えて、数分後によく手を挙げる。でも、自分の考えが当たっていた時は、それが他人が答えた場合であっても、大變うれしかったものである。ピチピチした女生徒のセーラーの群が今でも私の目に残っている。三松のM、T、Oさん等、いつも一生懸命黒板をにらんでいたっけ——。そして私の場合も全く此の如く、むという言葉がよく当たっていたように思う。先生のお顔によく穴があかなかったものである。一度汽車が遅れて国鉄通学の連中が一時間先生の講義が聴けなかった時など、「今日の時間よかったんよ。」等と友達に言われて腹が立ってしかたがなかった。

まっ黒のつめ矜で、教壇に立たれ、名前を大きく書かれて、更に大きな澄んだお声で、私が野地潤家でありますとおっしゃった最初の言葉、それに野地袋、インテリ山賊、ポンプ（鐘が鳴ったら、すぐ来る故なりとか）等のニックネームが数え切れない思い出と共に私の胸に残っている。

——昭和29年2月上旬稿——

なお、安永秀子さんは、「コスモス」と題する文章（旧作中より）

昭和二十四年一月二五日発行、郷土文芸誌「奔流」十一月号に投稿

したもの）を同封してくれていた。

コスモス

安永 秀子

秋——そして神無月ともなれば、蕭条と人の魂に迫って来る晩秋の匂いに、沈思につかれた心は、何時しか懐旧の憶いを辿って余念がない。

ちょうど一昨年この頃のことだったと思う。

漸く色づき初めた城山の樹々、次々に刈り尽くされて行く黄金の稔り、草むらの虫のさまざま、総べてのものに与えられる秋の収穫の欲びの蔭には、やがて来るべき「きびしい冬枯れ」への緊張した自然のたたずまいである。

「あの花と、空があったら、もう何もいりませんね」

午後の授業が始まったばかりの教室で、静かな空気にひたりながら、国語の教科書を開こうとしていた私は、突然の先生の言葉に、一寸驚いて瞳をあげた。先生の瞳は窓際の花瓶に揺れている数輪のコスモスに注がれている。そして沢山のコスモスが、窓下の花園にも遠く運動場の一角にも、秋風に乗ってぽっかりと咲いている。

白・薄桃色、濃いピンクの花々は、高く澄み渡った大空をパツクにして、如何にも可憐である。しかし、私達はその美しさに今はじめて気付いたのではなかったはずだった。いや、気づいて居りながら割合無頓着に見過して居たのである。先生のを深くみつめられる瞳と晴々とした顔を見て、私は何とも言いようのない気持ちに打たれた。

「コスモスと空があったら何もいらぬい。」という言葉は現実的ではないけれど、仮りに言葉の表現に少々誇張があったとしても、

此の時の先生の表情からも、あるがままの自然に接した、人間の魂からほとぼり出た言葉でないとは誰が言い得よう。

卒業以来早くも二年の歳月が流れた。級友の誰彼は此のような小さな出来事は忘れてしまっただろう。又もしかしたら先生御自身もお忘れになったかもしれないが……。

毎年此の花の咲く頃になると、必ず思い出される。

「いい先生だった——」

氣どらず、さりとて弱々しいというのでもなく、自分の生命を次々と咲かせて行く努力を怠らない。素直さが一層此の花の美しさをひきたてている。

△15V (三桜) 佐々木澄子 野地先生の思い出

野地先生が、校長先生に紹介されて壇の上に立たれた時、まだ学生服のぎこちない赤い顔をした人だったので一寸期待はずれみたいな感じでした。その時の校長先生の紹介の言葉もとてもユーモラスだった様におおえています。その頃は食糧事情の悪いころでしたので、松山は食糧が豊富だからという様なことを言われた様に思います。それに対しての先生のお言葉はおおえていないのです。

私も学校へ入ったばかりでしたので、どの先生がどうなのかというところを知りませんでしたので、私より少しばかりあとにいらした学生服の先生が二年の国語を持つということを知った時はとてもうれしく思いました。

はじめて私たち二梅の教壇に立たれ、こういったマークにはじまる文字が黒板にならびはじめる、戸まどいした様な感じでした。

御自分の名前を書かれ、色々な呼び名についておっしゃったこと、その時言葉の扉を叩き自分で開かなくてはいけないということ、「銀の匙」のお話をされたこと、言葉そのものについてはおぼえていないのですが、その時間の愉快だったこと、はじめて見えた先生に感ずる不安な気もちが全くなかったことを、今もってはつきりおぼえています。

その日家にかえり、新しい先生のことを姉たちに話しました。上の姉はそれから私が国語教室のことを話すたびに潤ちゃん先生などと言っていました。

それからはじまる国語教室は、今までならたどれよりもむずかしい方法でした。しかしそれになれると、その方法は、根本からわけて、そのつけた方法によってしらべ、あじわっていくといったやり方でしたから、ならったあとと、はじめの朗読とでは、意味において、その表現において、味わいが他の方法よりもどんなにすぐれていたかを、今もって感じを深くしています。

私の一番すきだったのは、先生の詩の紹介のあることでした。今までよんだこともなく名も知らない詩人のすばらしい詩を先生が朗々とした声でよまれるのは今でも印象に残っています。言葉をカードにとってもっていらっしゃる先生。そして、そのカードを教室にいらっしゃるとき、いつも新しいのをもって。私どもはそのカードにどんな美しい言葉や文字がかくされているか、いつも期待でいっぱいでした。

今年には創作がいく冊、短歌・俳句いく冊と、いつか教室で言われた時、私は先生の意欲のはげしさにおどろくと共に、ただ習ってい

るだけの自分にこれではいけない、自分ももっと勉強しなくてはと、むちうたれる思いでした。

いつもは先生の淡々としたお顔からなにも感じなかったのですが、ある頃は先生のお顔が沈んで暗く思われたのでした。私たちはそのことについて話し合いました、私たちの教室においての態度など。

しかし、そのことはすこしたってわかったことですが、先生のお父様のお体が悪いとのこと、どんなにかおつらいことだろうと話し合ったものでした。また、そのころでしたか、浦島や月の唄の長歌の講義でした。教室に入って見えた時のお顔は暗くてむしる悲痛そのものといった感じですので、私たちにはとても愉快な講義を下さる先生を、私はいたいたしく思いました。

教壇の上ではじめの礼のとき、笑いをかみこころしている先生、むつかしい、それでいてこやかな先生、手を白墨だらけにし、黒板を白板までに字をうずめての教室のふんいき、毎日の国語教室のまかれたこと、みんな一生懸命でした。

でも、組の中の二三人は先生の時間がいやだというのです。それはわからないという理由でした。わからないというより、わかりたくなかったのじゃないかと思えます。国語はきらいだという人たちがいましたから。

私にとって遠足もたのしい思い出です。先生がほうばの下駄にくるいふるしきつづみ(野地袋といいました。)をもって、汗をふき歩き歩かれた姿を思い出します。久方の台に行った時でしたか、斜面上でおべんとうを開かれた先生が、みかんだったかを落とされて、下駄をぬいで、コロコロと落ちて行くのを追っかけて降りられた時

は、みんな一せいに声をあげて笑ったものでした。

そのかえり道で、絵の展覧会に一五人かそれ以上だったかで参りました。先生の説明を聞いたり批評を聞いたりしました。今だにおぼえているのは、子供の絵の前で、「この子は哲學家みたいだね。」というお言葉です。また、私から水とうのお水をうけとられながら、「支那語でなんといったかしら？」といわれますので、「那茶水末ですよ。」と言ったことです。

江戸町駅で電車をまつ間、私と小椋さんに先生が野地袋をお預けになって、お手洗いにいらっしやう間に、袋の中にミカンを入れました。それをとても不思議がってお話になったので、もうおかしくて笑いをこらえるのがとても苦しく、小椋さんと顔を見あわせてニヤニヤしてしまいました。

そのあとで、電車賃をお借りしたのをお返しにまいりましたら、先生にニラまれてしまいました。でも、とても愉快で、誰もしらないはずをしたことで、胸の中でいつもニヤニヤしていたのです。つまらないことばかり書いてしまいました。今ふりかえって思うことは、いつも先生がとても情熱的で、私たちの兄さんの様におしえて下さったことです。記おくの中の先生は、油気のない頭のカーキ色の服の姿をしています。

失礼なことを書きました。おゆるし下さいませ。

— 昭和29年3月上旬稿 —

△16 V (三梅) 大西朝美 私達の野地先生

若さに満ち溢れている野地先生が私達の国語の先生です。私達は

皆で心から先生をお迎え致しました。国語教室も活気に満ち、野地先生はどのような方法で私達をお導き下さるのであるうかと、先生の時間の来るのを楽しみに待っていました。

先生の教育方法は、先ず朗読に重点を置き、声を出して読むこと、「先生も家で夜、本を声を出して読みます。」と言われ、私達は声を上げて練習を致しました。最初は家族のものが床に就いて後、本を読むのがはずかしい様な気も致しましたが、日が過ぎるにつれ、朗読に興味を感じる様に成りました。先生は朗読がお上手なので、私達は先生のお声にうっとりとして耳を傾けました。今でも私の耳には、あの先生のお声が聞こえて来る様な気が致します。

先生についての思い出と言えば、中学三年の卒業の時の学芸会の練習を、先生と共に出場なさる人が熱心にして居られた。この劇の中の文句に「春雨だ濡れて行こう。」という言葉があり、このポーズを先生がしておられた様子が忘れられず、雨が降る毎に、あの幼き頃の、先生のこと、又お友達皆様のことを思い出します。

又私の心に深く教えられていることの中に、この様なことがあります。丁度夏夏の日ざかりです。私達は体操を終えて、教室に這入りました。すると、次の授業の始まるベルが鳴りました。私達は余りの暑さに無作法にも下敷を出して風を送っていました。そこへ先生が来られました。先生は何とも言われません。私達はなおも風をおこし、暑さをしのいでいました。すると先生は大声で私達を叱りました。一同しんとなり、暑さも一ぺんに遠くへ逃げてしまい、私達は自分のなしていた態度を後悔しました。このことは一生私に忘れることの出来ない教訓です。

先生は又皆でお話を作りましようと言われ、「ある女の一生」というのだったと記憶していますが、この題に従って皆がお話を作ったこと等、私の幼き頃の楽しかった国語教室です。

先生のお家が平井の方になり、私達と共に通動して居られました。教室の先生と通動途上の先生とは違い、私達は親しみを感ずきました。でも、先生と生徒の私達なので、色々先生に教えて戴くことの出来なかつたのを今更乍ら残念に思つて居ります。

卒業して以来、幼き学生時代のことを振り返り、もう一度野地先生やお友達の皆様と共にお目にかかり、色々社会に出てからの歩んだ道話を話し合うことが出来れば等と空想にふけています。

先生、思いつくままに書き並べまして申訳も御座いません。少しでも先生の資料となれば幸いで御座います。

△17V (三松) 怒和洋子

あの頃の先生の思い出・印象を問われても、はっきりとこうだったと書くことが出来そうにもありません。特に国語教室なんて言われますと困つてしまいます。カスミのかかった様なボンヤリとしていた私ですもの、ただ何気なく授業を受けていたらいいのです。こんなことを聞かれることが解つていたらと、残念の上もございません。

ですから、国語教室から外に出て、ポツポツ先生の思い出等を書かせていただきます。原稿用紙を無駄にしちゃって申訳もございませんけれど、お役に立たなくとも、白紙でお返しするよりは気がきいているかも知れません。

味酒の校舎は本当に静かでした。すぐ裏つ側には山頭火の居たと
言う庵が御幸山の麓に見えましたし、東には、*天に遙けき石鍾の*
嶺の、高き望みを帯いだきつつ—と校歌に唱われた石鍾山が、冬
ともなれば雪化粧のあで姿を見せておりました。そして南には松山
の象徴と言われる天守閣が、西には国立公園となった瀬戸の海が
—。自然に囲まれた私達の教室で、ある時は激しい討論が行われ、
又或る時は平和な笑い声がこだましました。野地先生の御機嫌の良
い時には、うっとりする詞吟（朗詠）をやって下さいました。ピア
ノ・バイオリン等洋楽も良く聞いた私でしたけれど、反面尺八・琴
などは全然違った意味で好きでした。小さい時から父の尺八を聞
きなれて居たせいなのかも知れませんが、とに角東洋的なやわらか
い感じのするものを愛しました。国語の時間に聞く先生の詞吟（朗
詠）は又格別でした。いいえ、お世辞なんかじゃ絶対にございませ
ん。ラジオなんかでやっていると、先生を想い出すんです。私は先生
が詞吟（朗詠）をやって下さる時、お顔は見ないことにしておりま
した。真赤になつてお顔を拝見し乍ら聞くよりも、力強いお声だ
けを聞いている方が素晴らしい様な気がしましたから。

あれは十月頃でしたかしら、運動会ですから、多分その頃だった
と思います。世良先生の草笛で行進の練習をしたのも、あの頃だっ
たかも知れません。私の記憶は随分頼りないので、草笛でスケアダ
ンスをした頃のことと混同してしまっているのかもわからないので
すが、女学生だけの運動会なので別にこれと言って突飛な競技もな
く、印象に残っているものはただ、ダンスを一生懸命やったことと、
先生が良く走ったことだけなのです。先生のリレーだったのではし

う、馬の様に（本当にそんな感じでした）駈ける先生があるので、
誰だろうとよく見ると、国語の野地先生、びっくりしました。私は
こんな時活躍するのは体操の先生だけだと思っただけです。国語
の先生が砂煙を上げてかける図なんて、ちょっと想像出来なかつた
ことでしたもの。それからちょっと先生を見直した（おかしな表現
ですが）様なわけでした。

おかしなもので、こうやって先生のことを書いてると、あああんな
こともあった、こんなこともあったと、その頃のことになつたか
しう想い出されて参ります、ほぐれ始めた糸の様に——。そしてご一
緒に想い出すのは須山武夫先生です。教壇から良くおっこちられま
した。「化学の時間は教壇の長さが倍はいる」って誰もが笑ったも
のでした。つい最近先輩からお二人のこと等聞きまして感無量だっ
たのですが、現在とは関係のない、たわいな話で、そのことより
は、そういうふうには、先生のことを伝え聞いたり、こうやってお便
りを書く機会を持つことが出来たりすることによって、忘れられな
い先生として印象づけられて行く、そのことが私を感激させてしま
うのです。

いつの頃からか、山頭火と先生を結びつけて想い出す様になつて
しまいました。鉄鉢の中にもあられ、この句は先生に紹介していた
だいたのではないかと思います。先生と山頭火を結びつける様なもの、
そんなものはなさそうなのがするのですけれど、*桜いけた花*
府の中から一枝拾ふ—ときざまれた山頭火の石碑が市役所前の掘端
に立てられました。この前を通る毎に先生を想い出すことでしょう。
目まぐるしい生活の中で、美しい想い出にふける時間は本当にわ

ずかしかございませぬ。それだけに、大切な大切な時間であるだけに、過ぎ去った想い出は順を追って遠くへ遠くへと消え去って行きます。思いつくままに、あれやこれやと書いてしまつて、先生のご注文にはお応えすることが出来ませんでしたけれども、どうかお許し下さいませ。

冷たい風、無情の風は益々々ひしひしと迫って参ります。どうか御健康で御精進下さいませ。

——昭和29年2月11日稿——

△18V(三梅) 芳野幸子 思いでの黒板消し

戦禍をうけた校庭の片隅に大きく焼けえぐられた梧(あおぎり)にも新芽の吹く如く、すさんだ心にも生き抜かねばならない意地。誰もがそんな気持だつたらう。暑さも漸く癒えて秋風の呼ぶ頃から、国語の指導が始まった様に憶えている。唯あの頃がなつかしく脳裏をかすめる。まったく変わった国語の指導がものめずらしく、おのずから興味も深まっていた。このことは誰もが感じる共通の点であろう。そして、やがてこの学期も終るうとする頃から、私の黒板消しは始められたのだつた。

成長が遅いのか、それとも運動不足がそうさせたのか、小学校の頃はさほどにも感じなかった背丈は、女学校に入ってからひとしきり成長しなかった。そのために前列の中心に席をしめ無心に耳を傾けていたことを覚えてる。白墨の砂塵が飛ぶ、そしてつばの襲撃。考えてみれば、余り有難くもない光景だつた。黒板の隅々まで書き記されたものを消し尽くそうと思えば、頭から真白になることうけ

合ひだつた。が、そのことに一つの苦痛もなかった。そしてその学期も終り、冬休みに入った。

休暇中の手紙に、そのことを書きそえて置くことを忘れなかった。勿論その礼を希んではいなかったが、新学期を迎えるの最初の時間、御丁寧なお礼と「ことしも相変わらずの黒板消しをお願いします。」とおっしゃつたのだつたが、それから後というものは時間終了と同時に、黒板の前に集まる様になつた。そして消そうとうばい合う姿に、私は唯茫然と見入るばかりで——。

その後は敢えて消そうともせず、つとめてゆずる様にしていた。誰もが消したい気持、それを傷つけたくはなかった。

——昭和29年2月上旬稿——

△19V(三竹) 山崎美幸 城北高女後半期の国語教室とその先生を省みて

それは三年間の学園生活を通して一番印象に残っている教室であり先生である。赴任して来られたのは九月であつたが、黒の詰襟の服をきちんと着けられ、直立不動の姿勢で挨拶された先生は、大学の匂いがぶんぶんしていたように感じられた。

こうして、私達二年生の授業を受持つて下さることになつたのだつたが、私達(いや私)は、その最初の時間に於いて面喰つた。というのは、それ迄の国語学習と言えば、よみやわけを下調べしておけば、それで事足るだけの表面のみの学習だつたのに、いきなり、\$主題、\$構想と、質問を出されて、今までの学習とは全く変わったものだからである。けれど、其の後しばらくしてから、\$国

語学習の順序なるものを教えられ、それに従って学んだことが、卒業した今根強いものとなっていることは言う迄もない。

教室に於ける先生は、本当にほんとに国語と取り組んだ真剣そのものというより他に、形容の言葉は私には知らない。シャツ一枚にも拘らず、黒板を背にチョークを持って、汗ぐっしよりの講義には、私達も真剣にならざるを得なかった。一分の間もおろそかにせず、ベルと共に教室に見える先生の眼は、いつも笑みを湛えた水晶のようだったのを思い出す。そして、それは澄んだ青空のように美しかった。先生はきつと、いつもあの青空の様な心を持っておられたに違いない――。

或る日、たしかそれは十月頃だったかと思うが、いつものようにベルと同時に教室に現れた先生は、いきなり「みなさん廊下に出なさい。」と言われた。私達は内心おどしなながらも、ゾロゾロ出ると、先生は「あの空の美しさをみなさい。」と指された。そこにはすぐそこに見える山の深い松の緑に对照して、雲一つない澄み切った青空があった。その青とその時の美しさが、今でも胸にしみついていて、そんな青空が仰がれる度に、あの一瞬と、国語教室と、先生が一つに結びついて思い出される。

先生はよく自分の第一印象は大切にしなさいと言われ、その時もその美しさに因んだ和歌を一首黒板に書かれ、朗々とした声でもって朗詠をし、私達により深い印象を与えた。朗詠をされる時の先生は、いつもきまつて教壇の左端に斜に私達の方に向かって、(この時も)不動の姿勢でされるのであるが、それが又一層忘れられないものとなった。

「静かにしろッ。」これはたった一度、只一声、全校生徒をお叱りになった言葉である。くどくどしくお説教をされたよりも、私達の耳に心に強くひびいたことは言う迄もなく、叱られた生徒の一人ながら、私はそう大喝せざるを得なかった先生のお心を有難いものにする。凡そ人のお話を聞く態度として常識を外れた私達生徒の態度であったから――。小学校や幼稚園の児童ならまだしも、こうして社会に出てみると、種々の会合に行っても、この種の人の多いのに驚き、且つ又、その心理の理解に苦しまされるのであるが……。

正はどこまでも正とし、悪に向かつては、その場でびしびしと当たられる先生。教室に於いては、真剣そのものであり乍ら、時折エーモアをふりまいては、緊張した空気を柔らげつつ講義する先生。それこそ真のよい先生といえるのではないだろうか。お父様の亡くなられたのを告げて来ても、時間一杯授業をつづけられた先生の姿。それこそ真の教育者の姿ではなかったろうか――。広島へ転任される時、進学した級友から、「先生の為には、よろこばなければならぬが、あんなよい先生とお別れしなければならぬとは……。」という意味のお便りを受取ったことがある、その方達の先生を惜しむ心がどんなであったか、よく解った様な気がする。

今、あの教室の黒板を思い出してみる。一秒の間も無駄にしなかつた先生故に、率直に言って、とかく其の文字は乱雑? になりがちで、決して整然としたものではなかつたが、其の文字の正確なのと、どんな短い文章でも、と。をきちんと記して居られたのは、さすがは国語の先生だと常々感心させられた。

この様に、先生への思い出は数多くあるのだが、ここにもう一つ

忘れられない、次の様なお話がある。「……それは、もう梅など散ってしまつて、雪など珍しい季節だったので、辺り一面、雪景色に包まれたことがありました。その時、私の家の庭にある梅の木にも雪が積もつて来た。花が咲いたかの様に、美しかったのですが、その梅の木を背景にして、母の前方にうつとりと見惚れて立つて居た姿が、実に美しく思われました……。」というお話である。自然の「美」と母という尊い存在の「美」とが一つに溶け合つて、どんなに美しい光景だつたらうか。私にはその清らかさに満ちた美しい光景が一幅の絵となつて眼前に浮かび、感情を伴つて、母亡き私の胸をゆり動かすのである。

兎に角、野地先生という先生は、何時もあらゆる面に於いて、あらゆる意味の「美」を意識させる先生であつたと思われる。数ある学科・教室の中で、真の教育を受けたのは、あの国語教室（国語そのものをも含んで）のみだつたように思われる故でもあらうか、當時を省みて、まず脳裡に浮かぶのは、野地先生であり、国語教室である。

△20V（三梅） 寺田智子

城北時代の思い出といへば、何だかとても懐かしい気が致します。城北と野地先生、野地先生と三梅。それは今の私にとって遠い遠い少女時代の夢、楽しい夢です。本当にあの当時の国語教室には、活気があり、皆生々と喜びにあふれ、全く生きた教室だつたと思ひます。

高校時代でも、城北の時の如き、面白く、且つぐんぐん引っぱつ

て下さる先生には、私は恵まれず、自然国語に対する興味も薄れて行く感がありました。要するに、学科の好きか否かは、先生に左右されることをしみじみ味わい、悟つた次第です。

「生きた学科」、それには常に進歩がともなつています。次から次へと発展した国語に対する知識、私はあの当時習つたことには不思議に頭から去らず、現在に至つて、とても役に立ちます。これも先生のおかげと感謝して居ります。

当時の失敗をひとつ思い出してみますと、たしか試験に高浜虚子の俳句の感想を書く問題が出された時だつたと思います。私は女性だとはかり思つていたので、とても変な面白い批評を書きました。句も自分の批評も全然記憶に浮かんで参りませんが、男性と女性を違えたことだけは頭に残り、思い出しては苦笑しています。あの時ははばかりしいやら、情ない気で一杯でしたが、今となつては楽しかつたと思ひます。過ぎ去つたことは、何事も美しいものですね。

作文の交換批評。これも思い出です。特に私には……。なぜならば、とても先生にほめていただいたからなのでしょう。近田さんの作文を批評したことを、はっきり覚えています。又近田さんに私の作文を批判してもらつたことも……。でも、題名は忘れしました。只、とてもこまごまと近田さんの作品をほめたり、けちをつけたりしたことのみ覚えています。

先生に対する印象といへば、私の目に浮かぶのは、とても情熱的な先生だつたと思ひます。常にロマンチックな香をただよわせ、私

達少女を夢の世界へ、いや国語の新世界へ、ぐんぐんひっばって下さったと思います。

何か先生にアコがれていたのではないでしようか。今から考えれば、本当の子供でしたけれど、でも、ロマンチックな乙女でした。只何となく先生に憧れていたと思います。夢追う乙女には常に対象物があるものですね。

しばらく筆をもたないので、何をかいたか、何を書こうとしたか、変な文章になって誠に申し訳ございませんが、悪しからずお許し下さいませ。

——昭和29年1月中旬稿——

△21V (三菊) 八塚好子

先生、長らく御無沙汰致しまして申訳ございません。お許し下さいませ。

お正月の朝、分厚い封筒が年賀と一緒に着きました。何かしらと思つて、一寸びっくり致しましたが……。開けてみますと、色々調査の御様子、さっそく屋根裏へ行つて答案用紙やら、レポート・ノート等を探し出しましたが、ノートが見あたりませんので少々心配です。

色々取出して来たものを、一つ一つ見て行くうち、昔のことが次から次へと浮かんで参ります。家にばかり居て何の楽しみも言つて無い私には、学生生活が楽しく心によみがえつて一人で笑つたり致しました。

あの頃は三年菊組でした。城北のプールにほど近い教室（今の城北は勝山中学になってしまいましたが、特に楽しかったのは国語

でした。一時間中、明るく、そして元氣よく、或る時は短歌を朗詠したり、詩を朗読したり、乙女調で大声をはり上げ、

幾山河越え去り行かば寂しさのはてなん国ぞ今日も旅行くと、教室一ぱいひびかせながら朗詠しているのが聞こえて来る様です。

又、話し方の時間等、一人一人前へ出てお話し致しましたが、聞いて居るのはいいのですけれど、さて、自分となると、何も言えないものです、顔が真赤になつたり。そして又、二人ずつ一組となつて、さてお話という時等も、言葉は沢山あつても言えないものです。あの時つくづく言葉のむずかしさを知りました。これはいつもですが、書くことはやすくとも、言葉になれば言つてしまったことは取りけしは出来ません。（他の先生の時間ですと、唯国語を讀んで通釈をして少々文法をする程度で、国語と言えば木当に眠い時間でした。）

これからの国語では、話し言葉も間の時間に入れるのは、大変好いことではないでしようか。それから、方言採集・発声練習と、次から次と、国語に関係のあるものは一切、広い範圍に渡つて教えて下さいましたのは、先生に受持つていただいた私達の幸々と思つています。

発声は朗詠上の注意として、言葉をはっきりと澄んだ声を出す様にと毎朝アイウエオ等練習なさいと言われました。又これは試験の時ですが、先生の受持つで、音楽の試験、志摩先生が問題について色々説明なさつて、出て行かれた後で、先生は、あの発音はなかなかいいね等と言つて真似なさつたこともありました。

この様に国語教室では、いつも先生はどうすれば私達に興味深く又面白く教えることが出来るかと、色々苦勞なさいました。その印象はわずれられません。

きびきびといさましく教室に入っていらいっしょって、だまってるをして、くると黒板に向かったかと思うと、Sを書かれ、それから始められる先生。又、先生はよく汗をおかきになりました。あの頃先生は頭からお顔からだらだと流れ出る汗をぬぐおうともなさらず一生懸命講義をなさいましたね。私達はその姿を目前に見ただけで国語に力がわいて参りました。終った時には、ほっとした様子とともに、体をゆすりながら、どうどうと出て行かれるのも頭のどこかから思い出される一つです。

あの頃の国語は色々と有名作家が次々と出て来ましたが、その一人一人についても多く知りましたし、美の表現等も習っていてよかったですと思いました。三年生（高等学校）の時、私達は男女小共学で須山先生でしたが、或る時、一人ずつ自分の今までに読んだ小説から印象に残るもの、又はよかった所等の断片を書取って、それを謄写版ですり、皆にくばって、十分十五分ずつにわけ、交替で表現やら文法等について発表致しましたが、この様なことを習った時も、先生に教わったことが大變ためになりました。

教室の机をこちら向けたり、こちらにしたり、毎日毎日が変化のある国語教室。黒い学生服の姿のいつも変わらない先生。読書はいつも大きいお声ではっきりとよくわかる様に読んで下さるし、いつも私達と共にあって、共に研究し学んだ国語でした。思えば、楽しいことばかりです。

とりとめのない、だからとしたことばかり書いてしまいました
が、お許し下さいませ。

——昭和29年1月中旬稿——

△22V（三竹） 長平良トミ子

日本が戦いに破れたために、私達の母校がなくなったという考えは、あまり直接的で大人気ないですか。ともかく戦後日本文化伸展のため自発的に参与して母校も変化したのだと思ってはみませんが、やはりわびしいことに違いはありません。先生が城北に来られた時は、中学と名が呼ばれはじめた頃でしょうか。まだ世の中が騒然としていたと思います。

あの頃はデモがよくあったようので、教員のデモ隊の先頭に立って旗をかっついて、当時のイヨヤ百貨店前を、頭をかきながら行かれた先生の姿は今でも忘れておりません。

それから、先生が来られて間もなく十月、松山高校へ陰劇かげげを見に行きました。何か真実と愛の世界をえがいたものだったらしゅうございます。又、新年の言葉「青春の課題」というのを聞いたことも、先生がかわって来られた時、黒板に大きな字で名前を書かれて説明をして下さったことも、一ヶ月程前のようにも思われます。

中三の頃は、よく県庁前の一銭手相が流行しましたね。先生は女にあまいようでからいと言われたそうですね。私もあれから後三三度面白半分のみてもらいました。あの小父さんは今でも三越の横で……あれから老けたようにも見えませんが。

先生に習いはじめた頃は、一寸面くらった様で国文の時間が落ち

つきませんでした。馴れてしまったあとは、勉強しなくせがういてしまつて、とうとう卒業試験ものんきにすませました。でも、

国文の試験で一番参つたと思われましたのは文法の時でした。あの時は文語と口語の活用表を記す問題でしたが、あんなにうるたえたことはありませんでした。文法は化学みたいな気がしました。

それから、一度でしたが、床のひびきがまだ耳についている様です、先生が大きな声で叱つたことが。あの時はお向かいの栗田先生の講義が一応止んだ程でした。巾のひろい声でした。

試験の答案をいただく時でしたが、お点が悪くため息ばかり。その時はいつも「あきらめるんですな。」と言つて聞かせていただきましたね。以後今日に至る迄、その言葉は妙に私の心をおちつかせます。悲しみと不安はいつもこの言葉を口にする度に落ちつく様で、そのかわりに空虚が周囲をおおうような気がします。考えてみれば、良いようで困つた言葉です。

先生がおられた頃は短歌が盛んだつたですね。古町の西の何とかいうお寺でも一度ありました。あれは広島から岡本先生が来られた時でした。又校内では短歌班があつて、上位の点三つ目位まで朗詠しました。上手だなと思つたのが多かつたようでした。それから短歌で一番弱つたのは、クラスで歌会をした時の司会の番があつた時でした。意見が少なくて泣きたい程でした。

又、話したときの時間は、「私」という題でしたが、唇がふるえて弱りました。唇がふるえると言へば、やはりその頃でしたか、松山放送局(NHK)の金子アナウンサーのお話を聞かせてもらいましたとき、あの人の原稿用紙をもつている手がひどくふるえていた

ようでした。ノートによれば、とてもがぎくげこの発音が美しかつたらしゅうございます。

一つの言葉のよき、一寸した動作の面白味、ゆかしさ、余情など、その時々例をあげて知らせおしえて下さいました。そのためでしょうか、私はよく他人の一挙一動や言葉の一つ一つが気になつて、胸にひびくことがたびたびです。皮肉られた時は、その言葉が胸の中で大きなうずになることもありますし、反対におかしくならぬい時があつたり、又澄ました顔をしている重役タイプの人動作が可愛かつたりして、自分だけが笑つていて赤面するようなことも度々です。そんなのは私だけではないでしょうが、誰からでも人間的な匂いを感じるのはいずれしいものでした。

しかし、先生からはそんな人間的なすきを見つけることは出来ませんでした。先生にはどこに情緒があるのか分かりませんでした。おそらく先生の探究の強さと熱心が私達を引きずり、対象の外に置いて余裕を与えなかつたのでしよう。そう言えば、先生は情熱的な方でしたから、先生は文学の虫と言つても言い過ぎでは決してありません。

虫で思い出しましたが、よく「文法とはナフタリンの如きものである。何故かと言へば虫が好かない。」と言つていましたのをおぼえています。それから、野地虫・野地板とか良く言つて、先生とも良く笑いました。先生は煙草はおきらいでしたか、ふかしておられる所は見たことがないようです。化学の須山先生が長ギセルのんでおられたのは見たことがありましたが、今は巻きたばこでしょう、不自由がなくなりましたから。

いろいろなことをたどたどしく書きましたが、少しでもお役に立ちましょうか。ならば幸せですが。以前のインテリ山賊だったニックネームは今は何と変わっておいででしょうか。生徒さんにそっと聞いてみたいです。昔のことを思い出して、つい失礼を申し上げました。では、お氣をつけてお励み下さい。

——昭和29年1月上旬稿——

△23 V (三梅) 堀本滋子

城北時代と言うよりも、学生生活を通じて一番の思い出と言ったらいかしら。兎に角頭から去ることの出来ないのは、先生に教わった国語の実力とその時間の先生の印象等です。最初に先生が赴任していらして、私達の国語の所持と知った時、その御挨拶の仕方やその他の動作から風変わりな先生だなあと感じました。でも、そのまなこに他の人とは異なる熱意と言いましようか、とんでくる力が燃えていたことは間違いないです。今でも先生を思い出せば、一番に先生のまなこがやきついてくる様な感じが致します。

他の先生に比べて、一番身なりが質素で、どうでもいいといった感じ、又顔はと見れば、ひげが伸びてないのが珍しい位、こんな点何時迄も印象的です。黒い木綿の風呂敷を何時も下げてられ、みんながそれを野地袋と名づけたものでした。外観がこんなものだから、学習に於いても、ざっとしているだろうと思うと大違いました。日記を毎日つけなさいとか、又言葉使いの点、又表現の仕方の細かい点、国語の答案を長々とよみにくい字で書いていても、細部迄もれなくなおして下さったことなど、今でも身にしみております。

又、先生の言葉・発音がきれいだったことが耳についています。言葉のきれいな人は多いですけど、発音があんなにきれいな方は少ないですね。現住所が大洲とお聞きしたものですから、多少そのなまりが等と氣をつけていたのですが、全然なかったですね。非常に努力されていらしたことは、よく伺えました。いろいろとお休みに方に言をしらべたり、其の他多くの本を紹介して下さい、今迄にあんなに言語に対して御熱心な先生は知りません。

不慮に申す様ですが、先生の字が下手だったのも印象的でした。私も下手ですので恐縮ですが、先生ですと、どうしてもすぐ黒板に字を書かれますから、一番に字が印象に残るのです。先生の字は全然飾り気のないもので、それに対して先生としても全然無頓着の感じの様に見受けられました。又、字を美しくということと国語とは関係のないもので、字を間違わずに別ですけど、でも、解りよい字ではございました。誰にでも認むことの出来る字で、成程あの方がいいのかな等とつくづく考えます。又現在私がこうしてペンを走らせていても固くならなくて書けますもの。

北原白秋の詩や「奥の細道」など熱を入れて教えて下さったこと、何時迄も忘れることが出来ません。今でも、ラジオで聞いたり、中学校の生徒あたりが口にしてるのを聞くとか非常になつかしく感じます。「私の耳は貝の殻、海のひびきをなつかしくしむ」など、なんとなく耳からはなれません。「千曲川旅情の歌」など、あの時の朗誦が残っています。又何時か汽車の中でお会いした折、「ネムの花はあれですよ。」と、窓の外のを教えて下さったことなど、一寸したことで迄、先生に対する印象、思い出はつきません。

兎に角、六年間の学生生活を通じて、国語の時間に對し、又先生に對しての思い出が一番深くございます。先生の様な熱意のある方に、よき指導をして頂いた私達の学年が幸福であったと、今でもお友達とよく語り合つて居ります。

これからも、余りお役には立ちませんが、つとめてお力添えになるつもりですから、どしどし御連絡下さいませ願ひ申し上げます。返信用の封筒其の他のこと迄、細々とお氣をつかう必要はございません。

お休は肝臓が悪かつたとか、御無理をなさいませぬ様、お休を御大切になさいませ。奥様やお子様たちにもおよろしくお伝え下さいませ。

——昭和29年1月上旬稿——

八24V (三椽) 栗上孝子

広いけれど暗い茶の間の片隅にラジオをおいてある。馬の年、あげましておめでとくと、賑わしく呼びかける声もそこそこ、子供らは白い煙だと言つてあたたかい雑煮を口にし、よけい長くして見せる。はや四ヶ月も過ぎてしまったが、今は亡き老年だった父が、この元旦の、孫を混じえて一家が揃い、もの言わず笑み響う、あたたかいふん開氣を指し、一番楽しいひとときとして、よく語つていたことを思い出す。田舎でなくては得られぬ味だと感じる。

それに伴つて忘れられないのは、昔なつかしい先生の思い出である。どこかになんとなく余裕があり、落着がある。私は田舎の味というよりも一種特色ある伊予の味といいたい。食べ物じゃあるまいにとか、田舎者にはそうとしか見えないのかなあと笑われるかも知

れないが、私には当時そんなに感じて、ひとしおなじみ深さを増していた。もし、江戸っ子育ちの先生だったら……と想像せざるを得ない。というのも、去年十日程、東京に滞在したからだいたい見当はつく。

しかし、こんな一面も持つて居られた。電話にかわいい声で話しかけてくると、世の男性は声美人と言つて想像をたくましくするが、そんな見方ではなくて、先生が去られてから、よけい耳にするNHKの「二十の扉」のアナウンサー、この声又そっくり。その声をきいて伊予の味だと評する田舎者もまあないだろう。「もう一寸。」とうながす所、「借しい／＼」と言、迫力をかける所、なかなか私達には真似も出来ぬ、鋭敏な江戸っ子らしさがある。そして又、笑い方等、国語教室の生き写しの様な氣がして、顔の表情まで思い出される。

ゆつたりとした広い心の中に、物を感じとるせんさいな鋭敏さ。そして強きものを持つて居られた。やはり頭腦あるゆえに……かと、自分を悲しく思わせたり、そのふんいきにさせたりする。

又こんな事もある。それは私達にとつても長所となり短所となるかも知れないが、うれしいを含むということである。城南から統合によりクラスメート(現在、勤務先でも机を並べている。)となつた人に、城山で何かの道筋に先生のことによれたことがある。そのせいか、城北だった人は、その先生の影響を多分にうけて、一般にパツとした明るい所がなく、うれしいを含んだ感じがする。こんなのは時折あらわれる方がよい等とよく言われた。その時は私自身の性質からだと思つたが、広く考えて見ると、それまでのそれぞれの環境の

支配ばかりでないということがわかった。ものに感じやすかった私達の心に、どれほど先生の国語教室での影響が大きく強きさまみ込まれているかを思うと、又泉の様にあの頃の思い出が湧いてくる。何をもちたなくとも、思い出だけは忘れずもちたいものである。

—— 昭和29年1月上旬稿 ——

△25V (三菊) 石田八重子 師弟

ほかほかと春の日を背に浴びながら、私は「あー」と思い切り手足を伸ばした。眠気さました。かたわらにあった雑誌を取り上げた。美人の表紙がにこやかに笑いかけている。第一頁を開いてみた。プ
ラウニングの詩「春の朝」が私の目を引いた。「時は春 日は朝……」
……だまって読んだ……。もう一度読んでみた。私はたまたまなくな
って声を出して朗読した。「あげひばりなのりいで……」、朗読しながら、この箇所を浮き上らせて読んだことを思い出した。あの静かな
味酒野で学んだ国語教室の思い出が、今日の出来事のようにあり
と目の前に広がって来る。

丁度この詩を習った時のことだった。先生はこんなお話を私達になさった。

「この詩を今この教室に於いて学ぶということは、何か不思議な深い縁がある様に思えてなりません。というのは、生前哲学者として有名であった西田（幾太郎）先生が、広島大学の学に見えられた時に、その先生の愛弟子であった木村（素衛）さんという人が先生のカバンを開いてみました。すると、中からは一休何が出て来たと思
います？ 多分むずかしい哲学の本が飛び出すであろうと思っ

ましたのに、それに反して、ただ一冊、上田敏の訳した詩集が出されたのです。木村さんが何気なくその本を開くと丁度そこには、プ
ラウニングの「春の朝」の詩がのっていたのです。それを読みながら、木村さんは西田先生の心の偉大さに打たれたというのです。その詩をここで皆さんと学ぶということには、不思議なつながりがあり、又意義のあることだと思えます。」

と語られた。
妙にその時の光景がはっきりと私の目の前に浮かんで来る。先生はお話を続けられた。

「（木村さんは）西田先生をその時宮島に案内したのです。すると、礼拝の時に玉串の扱ひ方がわからなかったので、神主さんに、「どういたすのでござりましょうか？」とはっきりと尋ねられたということです。皆さんはこんな場合にはっきりと尋ねることが出来るでしょうか……。何事でも、わからぬことは納得の行く迄、突きとめることが大切ですね。」

先生のお話はだんだん熱を帯びて来る。私達は吸いつけられた様にじっと先生の口許を眺めた。

「木村さんの作品の中に『雪解』というのがあります。その中の『縫針』というところに、西田先生と木村さんの師弟の親しみが巧みに描かれ、その作中の始めから終り迄、西田先生のことを「先生、先生」と呼んでいるのです。私達は只一人でよいから、先生と言えば、ああ、あの先生のことかと頭にピンと来る先生を持ちたいものですね。」

と、しみじみおっしゃったのを思い出す。

私は先生のお話を聞きながら異様な先生の目の光に引き込まれて行ったことを記憶している。そうして、そのお話は、先生自身が自分と言いついて居られる様に思われ、教壇の前に立って居られた先生を、もう一度見直した。私はその先生の姿がありし日の西田先生の様に思われ、木村さんが私達である様な錯覚にとらわれた。そして私はただ一人そっとほほ笑んだ。

ナンテンの黒い影がぬーと伸びているのに、私は驚いて立ち上がった。

——昭和28年12月下旬稿——

三

わたくしのかつての国語教室について寄せられた感想二五例の学級別の内訳は、つぎのようである。

三年松組—4例、三年竹組—5例、三年梅組—8例、三年桜組—4例、三年菊組—4例、計25例

これらのうち、梅組の8例は、他の四組に比べて二倍になっているが、わたくしが学級担任をしていたということもあって、寄せられた感想が多くなったかとも考えられる。

収録した二五例のうち、第一三例までは学級編制順に配列したが、このたびは特別に編制順にはしなかった。

わたくしの国語教室、国語科授業について、学習者の立場からの感想・所見・思い出などを寄せてもらうよう頼んだのであるが、それらについての述べ方はまったく自在に思い思いになされている。私信風のもあれば、一種のエピソードにしぼって述べられたものもある。

新任の教師だった授業者への第一印象をはじめ、服装・容姿・挙

作について述べられているものが多い。わたくしは昭和二〇年（一九四五）八月下旬、当時在学していた仙台陸軍飛行学校から復員して、昭和二一年九月、城北高等女学校へ赴任するまで、郷里の自宅で待機していたが、就任にあたって背広を新調しうるような衣料上の余裕はまったくなかった。詰襟姿・坊主頭で赴任したのである。

国語教室における授業方法が従来生徒たちの受けてきたものに比べて変わっていた点を指摘している者も少なくない。文章（作品）の読みとりかた（解釈・鑑賞のしかた）について、順を追って、まためあて（目標）を決めて、進めていくことができるようにと指導したのである。西尾実博士の作品解釈の方法・手順をふまえて、提示したのであったが、受けてきていた学習方法に比べて、初めはややとまどい、やがては慣れ、熱心についてきてくれるようになった。授業者の態度・意欲・熱意に言及してくれた者も少なくない。長い間あこがれつづけていた国語科教育を実地に実践していくことができるようになったよるこびは大きく、当時わたくしは必死でとり組み、まったく無我夢中だった。真剣なまなざしのこととをとり上げてくれた生徒もいるが、そのように言われて、ああそうだったのかと思ひあたるのである。

授業者の国語教室で行った、朗読のこと、朗詠（短歌）のこと、朗誦（近代詩）のこと、発声・発音のこと、注意し叱ったこと、ユ—モアをまじえて話したことなどをとり上げて述べた者も多い。さらに、板書する文字の拙劣で無造作だったことも指摘されている。二四八名もの生徒たちを前にして行った国語科授業を通して、授業者のわたくしのほとんどすべては、見抜かれてしまっていたと言っ

てよい。

国語教室に新しい試みとして導入した、話しことば（独話・対話など）の授業、作文の交換批評、詩・詩集の折にふれての紹介などについても、とり上げてくれている。

また、国語教室での授業中、わたくしが発したことはや試みた話をいつまでも覚えていて、いきいきと再現してくれている者もいる。さらに内面的な影響にまで及んでいる例もある。

また、予餞会や遠足や運動会についての思い出にも触れて述べてくれている。

未熟で不備な面の多かった授業に対して、すべて好意的に記してくれたものばかりで、よき生徒たちへの感謝のおもいは尽きない。

三〇数年も前の実践ながら、これらの感想を通じてよみがえってくるものは今なお新しい。

（昭和57年5月8日稿）（本学教授）